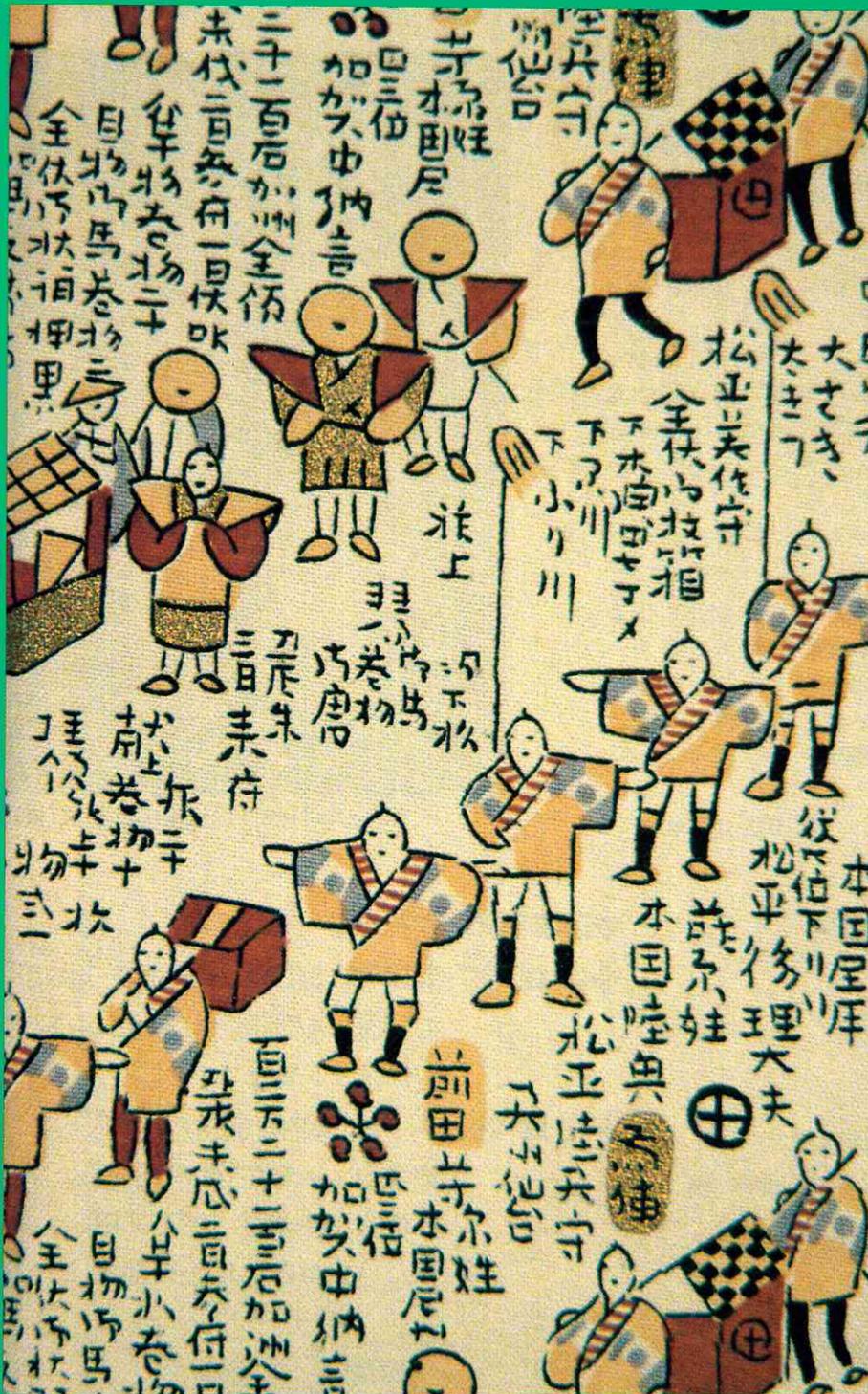


道中日記の世界

回覧

—江戸時代の旅と信仰—

平成十年三月二十一日(土)～五月十日(日)



講演会

演題 『江戸時代の旅と交通』
日時 平成10年4月5日(日) 午後1時30分～3時30分
場所 狭山市立博物館 研修・講義室
講師 日本学士院会員 学習院大学名誉教授 児玉 幸多 氏

●受講希望の方は、3月1日(日)から狭山市立博物館へ
電話でお申込み下さい。(定員50名)



狭山市立博物館

開催にあたって

旅は、いつの時代でも老若男女を問わず、最大の娯楽であり、最良の休暇でありましょう。時には、生活のアクセントになり、時には、心身のリフレッシュを促す効果を考えることができます。現代でも、書店の店先では、観光案内や旅行ガイドが最前列に並び、旅行業界は、今や10兆円産業と呼ばれて久しくなります。

現代の旅は、テレビや雑誌などのマス・メディアにより、私も行ってみたい、見てみたい、という気持ちから旅立ちの準備が始まるわけですが、このような旅の楽しみ方が庶民に広まったのは、江戸時代のころからだと考えられています。

今回は、現代の旅行ブームの原点である江戸時代の旅の世界と、旅の目的として重要な意味を持っていた信仰について併せて見ていきたいと考えております。多数の皆様方にご観覧いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の調査・出品を快くご承諾下さいました資料所有者、管理者の方々に深く感謝申し上げ、開催のごあいさつといたします。

平成10年3月

狭山市立博物館



文政10年(1827)伊勢道中日記牒(帳)

講演会

演題 『江戸時代の旅と交通』

日時 平成10年4月5日(日)
午後1時30分～3時30分

場所 狭山市立博物館 研修・講義室

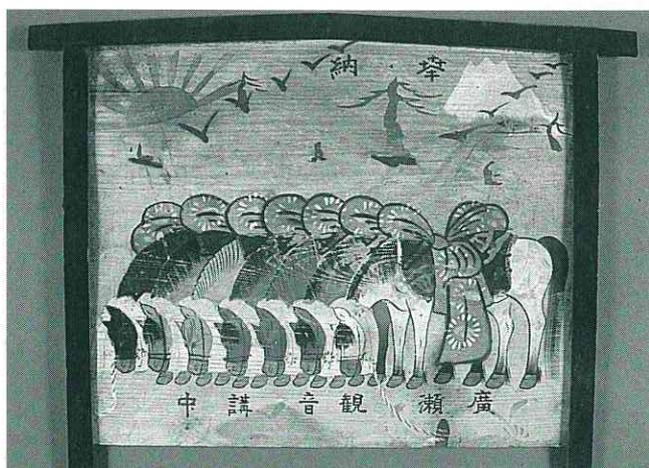
講師 日本学士院会員 学習院大学名誉教授 児玉 幸多 氏

●受講希望の方は、3月1日(日)から狭山市立博物館へ電話でお申込み下さい。(定員50名)

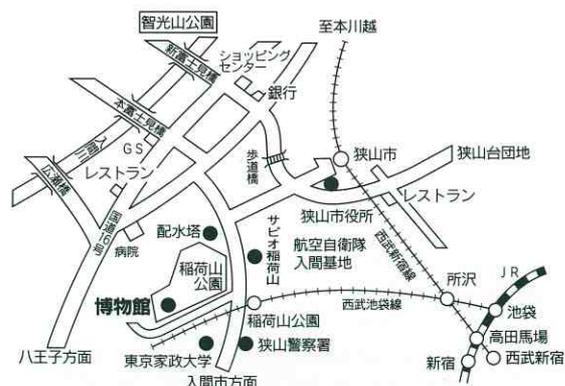
◆開館時間 午前9時～午後5時

◆休館日 3/23(月)、3/27(金)、3/30(月)、4/6(月)
4/13(月)、4/20(月)、4/24(金)、4/27(月)
4/30(木)、5/6(水)

◆入館料 一般150円(100円)
高校生・大学生100円(60円)
小学生・中学生 50円(30円)
※()内は20名以上の団体



広瀬観音講中奉納絵馬



- 西武池袋線「稲荷山公園駅」から徒歩3分
- 西武新宿線「狭山市駅」西口からバス(稲荷山公園駅行)終点徒歩3分



狭山市立博物館

〒350-1324
埼玉県狭山市稲荷山1-23-1 稲荷山公園(ハイドパーク)内
TEL. 042-955-3804 FAX. 042-955-3811

道中日記の世界

— 江戸時代の旅と信仰 —

平成十年三月二十一日(土)～五月十日(日)



狭山市立博物館

開催にあたって

旅は、いつの時代でも老若男女を問わず、最大の娯楽であり、最良の休暇でありましょう。ときには、生活のアクセントになり、ときには、心身のリフレッシュを促す効果を考えることができます。現代でも、書店の店先では、観光案内や旅行ガイドが最前列に並び、旅行業界は、今や10兆円産業と呼ばれて久しくなります。

現代の旅は、テレビや雑誌などのマス・メディアにより、私も行ってみたい、見てみたい、という気持ちから旅立ちの準備が始まるわけですが、このような旅の楽しみ方が庶民に広まったのは、江戸時代のころからだと考えられています。

今回は、現代の旅行ブームの原点である江戸時代の旅の世界と、旅の目的として重要な意味を持っていた信仰について併せて見ていきたいと考えております。多数の皆様方にご観覧いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の調査・出品を快くご承諾下さいました資料所有者、管理者の方々に深く感謝申し上げます、開催のごあいさつといたします。

平成10年3月

狭山市立博物館

付記

- このパンフレットは、平成10年3月21日(土)から5月10日(日)まで開催する平成9年度春期企画展「道中日記の世界—江戸時代の旅と信仰—」のパンフレットである。
- 会期中に展示替えを行うため、パンフレット収録資料でも展示されていない場合がある。

●協力者一覧

(順不同 敬称略)

久下 栄一 久下 仁一 佐藤 盛秀 吉野 栄治郎
明 光 寺 大井町立郷土資料館 財団法人利用振興物流会物流史料館

●参考文献

- 『埼玉県史』通史編3 近世1 埼玉県編 1988 • 『埼玉県史』通史編4 近世2 埼玉県編 1989
- 『埼玉県史』別編2 民俗2 埼玉県編 1986 • 『狭山市史』通史編1 狭山市編 1996
- 『狭山市史』近世資料編1 狭山市編 1985 • 『狭山市史』民俗編 狭山市編 1985
- 『入間市史』近世史料編 入間市編 1986 • 『埼玉県の歴史』小野文雄著 山川出版社 1971
- 『水富村郷土誌』山崎真太郎著 山崎忠男 1976 • 『江戸時代図誌』6 筑摩書房 1977
- 『江戸時代図誌』8 筑摩書房 1977 • 『江戸の旅』今野信雄著 岩波書店(岩波新書) 1986
- 『宿場と街道』児玉幸多著 東京美術(東京美術選書) 1986 • 『旅』(週刊朝日百科日本の歴史75) 朝日新聞社 1987
- 『江戸の旅人たち』深井甚三著 吉川弘文館 1997 • 『街道・宿場・旅—旅人からのメッセージ—』大津市歴史博物館 1991
- 『狭山市の無形民俗文化財(1)広瀬浅間神社の火祭り』狭山市文化財調査報告15 狭山市教育委員会 1988
- 『お伊勢参り—江戸時代の庶民の旅—』大宮市立博物館 1993 • 『中山道六十九次の旅』大宮市立博物館 1995
- 『大井町の民間信仰—講』大井町郷土資料館調査報告書1 大井町郷土資料館 1994
- 『江戸の新興宗教—文京の富士講—』文京ふるさと歴史館 1995 • 『歴史をあるく—埼玉の札所めぐり—』埼玉県立博物館 1997
- 『特別展旅と信仰—富士・大山・榛名への参詣—』板橋区立郷土博物館 1996

月日は百代の過客にして 一旅へのいざない

旅とは……

さて、皆さんにとって、旅とは……どのようなものでしょうか？

広い意味での旅を考えたとき、旅は、人類が誕生したときから始まっていたと考えることができます。

たとえば、日本の歴史の世界をみると、縄文人は、採集狩猟を生活の糧かてにしていたので、季節が変われば獲物や食糧を求める旅に出ました。源平の合戦では、この狭山を含めた坂東の武士たちが源氏方と組んで、奢れる平家を打倒するため西へ西へと攻め上り、押された平家方は、落日の旅へと追いやられていきました。遠く世界を見渡しても、三蔵法師にジンギスカン、マルコポーロやナポレオンのように、いつの時代でも果てしない旅を夢見た多くの人たちがいたわけです。

また、仕事を目的として旅に出ている人たちもいました。例えば、鍬や鋤などの農耕具を修理する野鍛冶、神社に神楽を奉納する芸人、富山の薬売りのような行商人なども道中で活動した人たちといえるでしょう。

江戸時代では、参勤交代などの政策、それに伴う街道整備などにより、交通事情が改善されていきました。そして、時代を経るに従って、庶民の活動範囲が広がり、旅に対する制限も少なくなっていきました。

なかでも、一般の人たちは、信仰によってより大きなご利益や靈験を授かるということから、まだ見たことのない世界を知るよい機会となりました。それが信仰という目的をもった旅の誕生であり、だれもが行ける旅が生まれるようになったというわけです。

観音講

それでは、観音講の世界から、旅と信仰との関わりについて見ることにしましょう。

観音講は、一般的には村の中の人たちが寄り合い所に集まり、観音様の前で鉦太鼓かねだいこを鳴らして「観音経」を唱え、終わると雑談をしてお開きとなります。このように村社会で行われている講を村内講と呼びます。

また、観音様には、人間世界を含め六つの世界があるという六道思想ろくどうの中で、それぞれの世界に観音様がいるということから、六観音あるいは七観音という信仰が生まれました。これらの信仰をもとに、札所巡礼が形成され、「七観音めぐり」とか三十三観音霊場の信仰が生まれてきたのです。このように、村社会の外の信仰にその構成員が参詣する講を総参講、その構成員の代表が参詣する講を代参講と呼びます。



広瀬観音講中奉納絵馬

三十三霊場を巡礼することは一大事業でしたが、なかでも、西国三十三か所、坂東三十三か所、秩父三十四か所を巡礼すると「百観音」と呼ばれ、珍重されました。

このように札所については、全国行脚のものから、札所写しと呼ばれ、一郡程度あるいは一地域範囲で行脚できるものも出現しました。果ては、一寺を参拝することで、百観音霊場を巡礼したのと同じ功德やご利益が得られるものまで出現しました。

平成の世になっても、ほけ封じの新霊場も生まれていることから、心のやすらぎを求める気持ちは、今も昔も変わらないのかもしれない。

百聞は一見にしかず 一道中日記を見る

伊勢まいりに見る道中記録

それでは、旅先のようなすを知るために、伊勢まいりでの道中記録を見ることにしましょう。伊勢まいりは、庶民の旅の代表といわれ、江戸時代には、信仰のための旅として全国的に参詣が行われました。特に、地方からの農民たちは、信仰祈願の後、不作や飢饉への対策として新種の稲や野菜の種を仕入れ、女性たちは、白粉やかんざしなどのみやげものを買ったようです。中世以来の自治都市であった内宮の門前宇治と外宮の門前山田は、これら大勢の参詣者により、活況を呈していました。伊勢でのひとときを済ますと、参詣者は、西国巡礼や四国の金刀比羅宮、中山道を通して善光寺などに足を延ばすのが、一般的であったようです。

道中での記録の中には、道中日記(旅日記)、領収控、朱印帳(納経帳)、道中記などがあります。どれも旅先で携帯する必需品で、その内容を見ると、宿場から宿場までの距離とその日数、宿場でのもろもろの物価などが詳細に記載されています。このように旅先の行程を忠実に事細かく記録した背景には、次回自分以外の人と同じ道中を行くときに参考とする控えとして、記録したと考えることができます。

道中日記とは……

道中日記とは、旅先の行程を忠実に事細かく記録した日記です。「本日〇〇より△△に至る。名所□□あり。××にて昼食。☆☆宿◇◇屋に泊まる。……」などといったように記録していきます。ときには、あとで解説する領収控を兼ねて、宿代や昼食代などを覚えに記したものもあります。なかには、現在ではあまり知られていない名所・旧跡も、宿場や道すがらの観光スポットとして記録されているものもあり、興味が引かれます。

領収控とは……

領収控とは、旅先で支払った宿代や昼食代などの費用を控えたものです。はじめに、旅仕度のおり、白紙の半紙を折って、それを束ねた帳面を作り、旅先で宿代や昼食代などを確かに受け取った旨、受取人に書き入れさせ、捺印をもらったものです。現在では、一枚書きの領収書が多く用いられますが、江戸時代では、受取人が自前で領収書を作らずに、こういった方法でやりとりしていました。宿屋では、利用客が発券するときには、この領収書をたくさん記帳したため、書かれた文字もその忙しさから記号化されたくずし文字が見られます。



文政10年(1827)伊勢道中日記(帳)
平塚から東海道にて伊勢まいり、伊勢より名張越えて奈良、多武峯、堺を抜け、大阪、京都を経て中山道を通り、善光寺まいりのち帰村。約1か月の旅程。

朱印帳(納経帳)とは……

朱印帳(納経帳)とは、寺社に参詣するときに、お米やお金を奉納したお返しに社号や山号、寺号、仏号などを書き入れる帳面です。そのとき、寺社の朱印を押すところからこの名が由来しています。寺院の場合は、元来お経を奉納したことから、納経帳とも呼ばれています。この朱印をいただくことにより、御札と同様にその寺社のご利益が自分の家に持ち帰ることができるという考えと、観音霊場巡りのように多くの寺社をまわって歩くために必要とされたものと考えられます。

伊勢西国秩父道中記録
天保13年(1842)~
14年(1843)

納経帳	道中日記	
	定宿帳	旅宿帳(領収控)

※定宿帳：以前から決めてある宿泊予定の宿を控えた帳面。



道中記とは……

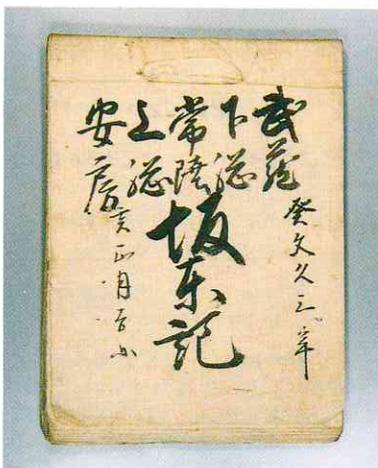
道中記とは、案内記、細見記などと呼ばれた出版物で、宿場から宿場までの距離、宿代、駄賃、名所旧跡、おみやげなど旅行に必要なあらゆる情報が満載してあります。ちょうど現代の旅行ガイドブックと同じ役割を果たしていました。なかには、現代でいう版を重ねたベストセラー物や、それぞれの街道道中を詳細に説明したシリーズ物もありました。道中記と同じようなものとして、「東海道中膝栗毛」のような道中物の読本、在野の知識人による「紀行文」、江戸・京都のような大都市や地方の名所旧跡をまとめた「名所図会」などがありました。

どこまでもいこう 一道中日記を知る



弘化3年(1846)信濃・越後・出羽・陸奥・常陸・下総・上総・安房道中日記帳

松山、深谷より中山道、伊香保・草津經由で善光寺、高田にて日本海沿いを西へ、立山室堂より引き返し富山、柏崎、寺泊、新潟、村上、越後・出羽国境より出羽三山詣で、山寺立石寺を通り仙台へ、松島、金華山から戻り、白石から奥州道中を南下、途中より水戸へ立ち寄り、笠間、筑波山、土浦、香取、鹿島、銚子を経て、東金より外房、内房を廻り江戸より戻る。77日間、1234.46kmの旅程。



文久3年(1863)武蔵・下総・常陸・上総・安房・坂東記

上尾・粕壁から下妻・筑波山・加波山を渡り水戸を抜け、佐竹寺より南下、那珂湊から海岸沿いを鹿島に出て、小見川より銚子に寄り、戻って香取・佐原を過ぎて、成田に着く。この間、約2週間の旅程。



旅の途中の楽しみは おみやげ・名物

おみやげ・名物

旅先での楽しみのひとつに、おみやげがあります。みなさんご家族にお友だちにご近所にと、思案投げ首のときもありますが、買い物ツアーなども旅のジャンルに数えられるようになりました。元来、「みやげ」は、寺社から持ち帰った御札や縁起物などを、旅に行かなかった人たちに配り、ご利益を分かちあったことから、「宮筒」という漢字をあてていました。その後、門前に市場が立つようになり、その土地の特産物なども売買されるようになって、「土産」という漢字があてられるようになったといわれています。



大山こま(大山講)

お山は晴天、六根清浄 — 信仰のための旅 —

信仰のための旅

一般の人たちは、日々の生活のよりどころとして、信仰の心を持っていました。従来、信仰においては、屋敷神や氏神氏子、あるいは祖先の霊や檀家など、家社会や村社会の中で営まれていましたが、交通事情が改善され、いろいろな地方の話を伝え聞くうちに、信仰の心も、より大きなご利益や靈験を授かるというように、そこから遠路はなれたものに頼るという動きにかわります。それが信仰という目的をもった旅の誕生であり、だれもが行ける旅が生まれるようになったというわけです。

遠路はなれた所へ行くという信仰には、御師と呼ばれる人たちによる布教活動も一因にあります。伊勢まいりを始め、富士講、大山講、御嶽講などでは、御師が、お祓いや御札を配ったり、講員の宿泊の便宜を図ったりします。

また、村内で講元や講員の尽力が欠かすことのできないものでありました。講員の中には、いろいろな事情で参詣に行けず、そのことで信仰心に対して不利益のないよう、講では、代参によって講員への救済をも助力していました。

こうして講は、御師の便宜を得て、旅への出立となります。旅の途中は、いろいろな見物や名物に出会いながらの楽しい旅でした。その行程では、気楽に行けることから「物見遊山」の旅ともいわれるようになりました。

講の目的は、寺社の参詣にあります。寺社への道のりは、深山靈峰にあるため、街道とくらべて上り下り、急な石段と大変きついものでした。このため、参詣が終わり、街道沿いの宿場に到着すると、さっそく参詣の疲れを癒すため、温泉につかったり、宴を催したりしました。これを「精進落とし」といいます。

そして、村にもどると、道中も無事であったことから、村の鎮守様に報告がてら参拝しました。これを「御礼まいり」といいます。御礼まいりでは、絵馬や燈籠を作り、奉納しました。

代参講の場合には、参詣に行けなかった人たちにも、参詣や道中の出来事を報告したり、御札やおみやげを配ったりするために、寄り合いを持ちました。これを「下山日待」といいます。



掛軸 榛名山満行宮

富士浅間講

富士山は山岳信仰の地でありましたが、江戸時代になると、角行藤弘・食行身祿が出て富士山の登山参拝を目的とした富士信仰が盛んとなりました。庶民の信仰として活動していたため、いろいろな理由で富士山に登れない人たちのために、村々に小山を富士山に見立てた「富士塚」を作り、地域での信仰の対象としていました。狭山でも柏原、堀兼などの地区、あるいは上奥富梅宮神社、青柳氷川神社などの境内に「富士塚」が残っており、広瀬地区では現在でも講が行われています。特に上広瀬浅間神社では、富士浅間講の行事として毎年8月に「浅間神社の火祭り」が行われ、狭山市無形民俗文化財に指定されています。

榛名山

群馬県榛名町の榛名神社は、雷除け、雹除け、虫除け、五穀豊穰、雨乞い、養蚕倍増、火伏せなどといった、主に農業信仰にご利益があり、狭山でも熱心に信仰されていました。参拝にあたっては、榛名山に登ったり、帰りに伊香保温泉に立ち寄りしたりしたようです。

古峰原講

日光から山を隔てた栃木県鹿沼市にある古峰神社は、日光修験の一山にあたり天狗信仰のあるところですが、また、火伏せ、雷除け、雨乞いなどにご利益があるといわれ、明治時代初期から盛んになったといわれています。

善光寺講

長野県長野市の善光寺は、「信濃の善光寺」「牛に引かれて善光寺参り」など庶民に親しまれ、天台宗・浄土宗の阿彌陀信仰により宗派をこえて参詣されています。江戸時代には、江戸での出陣帳などにより信仰を集めました。

御嶽講

東京都青梅市の御嶽山は山岳信仰の地でしたが、御嶽山の白狼が日本武尊に火災や盗賊を防ぐよう命じられたという故事により、火伏せや盗難除けで広く信仰を集めました。現在でも年の瀬になると入間川、入管地区などに御師が御札を配りにまわります。

秋葉講

静岡県周智郡春野町の秋葉山は山岳信仰の地で、三尺坊と呼ばれる天狗を祀っていました。この三尺坊が観音の化身で火伏せの法に通じていたという伝承から、火伏せの神として知られています。狭山では、いろいろな理由で旅に出られないひとびとのために、大宮市指扇の秋葉山の分社に参拝していたこともあるようです。

成田山講

千葉県成田市の成田山新勝寺は、真言宗の寺院で通称成田不動と呼ばれ親しまれています。江戸時代には、善光寺同様出陣帳などでも有名でしたが、歌舞伎役者の市川團十郎が信仰したことから庶民にも広く伝えられたといわれています。

大山講

神奈川県伊勢原市の大山は、雨乞いの山としての農業信仰、海上での船の位置を知る「ヤマアテ」の山としての信仰があったところです。落語の中でも、「大山詣り」という唄があるほど、江戸時代には信仰の山として栄えました。狭山では、農業信仰とともに男子が村々で大人として一人前に扱われる行事として「大山詣り」が行われました。明治時代以降も、日清日露戦争や太平洋戦争で出征する人たちが、武運長久を祈り一人前の兵隊になったことを報告することで参詣された時代もありました。

戸隠講

長野県上水内郡戸隠村にある戸隠神社は山岳信仰の地で、一山八十余坊といわれる戸隠修験の中心であります。ここでは「聚長」と呼ばれる御師が講の世話をしています。主に雨乞い、農業信仰を目的に各地から参詣に訪れています。

高尾山講

東京都八王子市にある高尾山薬王院は真言宗の寺院で、成田山新勝寺、川崎大師平間寺とともに真言宗関東三山の一つに数えられています。護摩を焚き、火伏せや盗難除けで広く信仰を集めました。

その他の講

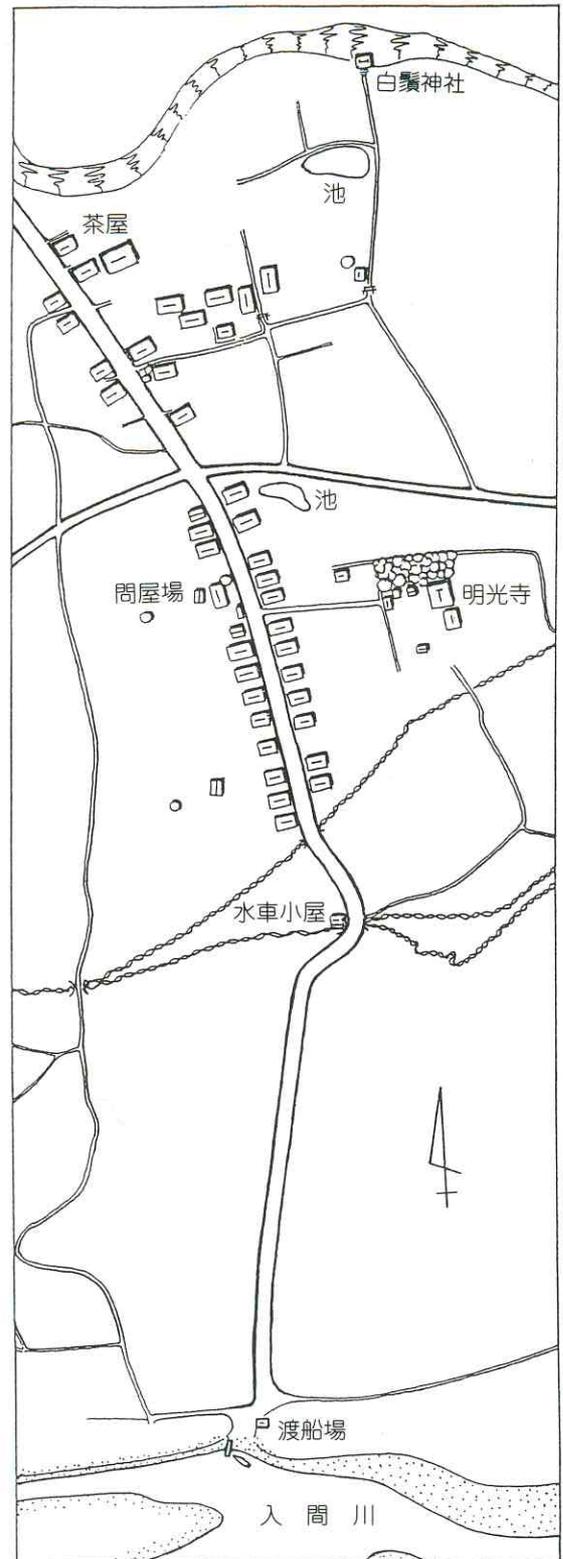
出羽三山講（山形県月山、羽黒山、湯殿山）平心講（埼玉上尾市八枝神社）三峰講（埼玉県三峰神社）など

日光脇往還 根岸宿 —宿場の復元を試みる—

日光脇往還は、東京都八王子市から埼玉県、群馬県を経、栃木県佐野市で日光例幣使街道につながる街道です。戦国時代には、関東を南北に貫く重要な街道で、甲信、越後と対峙する地域をはしっていました。江戸時代になると、日光東照宮の火の番勤務を命ぜられた八王子千人同心が、承応2年（1653）よりこの街道を通り役務についたため、「千人同心日光道」とも呼ばれていました。

根岸宿は、高麗郡根岸村にあたり、上りは高萩宿へ、下りは扇町屋宿へ結ぶ宿場で、入間川左岸の水田地帯に囲まれたところに位置しています。宿場の様子は、問屋場を中心に街道沿いに軒をならべていました。八王子千人同心の日光勤務は一般的には総勢百人単位で定期交代するので、宿場での対応も苦慮し、元来根岸村が小村であったため、宿場では近隣の上広瀬村、下広瀬村、笹井村に、人馬の提供を求める助郷を依頼していました。また、入間川に面していたことから、渡船場を開設していました。

江戸時代の後半になると、日光脇往還の交通量は、日増しに増えていったようです。その理由としてあげられるのが、「富士山・大山・日光等に参詣する道者」つまり信仰のために旅に出た人たちでした。幕末になると交通量の増加と入間川の出水により、渡船場の運行に入間川右岸の入間郡黒須村が介入したことにより争論が occurred。この時の交通量増加の理由にも、大山詣などの通行の増加を指摘しています。



日光脇往還根岸宿復元平面図 0 50 100m

展示資料一覧

番号	資 料 名	時 期 等	所 蔵 者	備 考
1	道標 地藏菩薩	元禄14 (1701)	当館	
2	道標 地藏菩薩基台	宝暦3 (1753)	当館	
3	売薬箱	昭和初期	個	
4	観音講 道具 鉦		当館	
5	観音講 道具 太鼓		当館	
6	観音講 道具 錫杖		当館	
7	観音講 道具 掛軸 「如意輪観音」		当館	
8	「観音経講中連名簿」	文久3 (1863) ~	当館	
9	広瀬観音講中奉納絵馬		当館	
10	観音経		当館	
11	数珠		当館	
12	「観音霊験記真抄」一・三	原本は宝永2 (1705) 初版刊	当館	
13	枱 (百観音刻印入)		当館	
14	秩父三十四ヶ所巡拝供養塔文字案文	寛政10 (1798)	当館	
15	「秩父霊場三十四ヶ所納経帳」		当館	
16	「伊勢西国秩父日記帳」	天保13~14 (1842~43)	当館	
17	「旅宿帳」	天保13 (1842)	当館	
18	「伊勢月参定宿帳」	天保13 (1842)	当館	
19	「納経帳」	天保13 (1842)	当館	
20	「朱印帳」	現代	当館	
21	「納経帳」	明治14 (1881)	当館	
22	「納経帳」	明治15 (1882)	当館	
23	「納経帳」		当館	
24	般若心経 写経		当館	
25	「坂東秩父六十七ヶ所道記」	江戸後期	当館	
26	掛軸 伊勢大神宮		当館	
27	掛軸 伊勢大神宮		当館	
28	御札 天照皇大神宮		当館	
29	大麻		当館	
30	寺往来手形	安政4 (1857)	当館	
31	金剛杖	弘法大師	当館	
32	たばこ入れ箱		当館	
33	磁石		物流史料館	
34	道中枕 兼貴重品入		物流史料館	
35	道中紙入		物流史料館	
36	財布		物流史料館	
37	「伊勢道中日記帳(帳)」	文政10 (1827)	当館	
38	「信濃越後出羽陸奥常陸下総上総安房道中日記帳」	弘化3 (1846)	当館	
39	「旅宿帳」	弘化3 (1846)	当館	
40	「(大山講)道中日記帳」	嘉永2 (1849)	当館	
41	「武蔵下総常陸上総安房坂東記」	文久3 (1863)	当館	
42	曲亭馬琴著 「金毘羅船利生纜」第八編三・四合本		物流史料館	
43	「諸国道中袖かゞみ」全		物流史料館	
44	「大日本早引細見絵図」		物流史料館	
45	「日光道しるべ」		物流史料館	
46	「日光道しるべ」		物流史料館	
47	「大和道のしおり」		物流史料館	
48	引札 「大和めぐり本街道順案内の図」		物流史料館	
49	「大和めぐり順案内の図」		物流史料館	
50	「京案内道しるべ」		物流史料館	
51	大津絵	東海道大津宿	個	
52	くずもち	川崎大師		
53	せき止め飴	川崎大師		
54	善光寺唐辛子	善光寺		
55	大山こま	大山		
56	のぼり	富士浅間講	当館	
57	装束	富士浅間講	当館	
58	菅笠	富士浅間講	当館	
59	草鞋	富士浅間講	当館	
60	角樽	富士浅間講 広瀬③講	当館	
61	納札	昭和44 (1969) 富士浅間講	当館	
62	納札	昭和56 (1981) 富士浅間講	当館	
63	「富士山道知留辺」		物流史料館	
64	「不二山道知留辺」前編		物流史料館	
65	御札	榛名講	当館	
66	「榛名山日待関係書類」	明治11 (1878) ~ 榛名講	当館	
67	文書箱 「日待関係書類」	榛名講	当館	
68	掛軸 「榛名山満行宮」	榛名講	当館	
69	御札	古峰原講	当館	
70	袈裟	善光寺講	当館	
71	袈裟箱	善光寺講	当館	
72	「善光寺如来のこと」	善光寺講	当館	
73	御札	御嶽講	当館	
74	猪口 「御嶽山大々講」	御嶽講	当館	
75	御札	秋葉講	当館	
76	「秋葉山参詣案内図」	秋葉講	物流史料館	
77	御札	成田山講	当館	
78	袈裟	成田山講	当館	
79	権田直助筆 「阿夫利神社」	大山講	当館	拓本
80	御札	大山講	当館	
81	御札	戸隠講	当館	
82	御膳証並び御籤文	戸隠講	当館	
83	御札	高尾山講	当館	
84	札板		当館	
85	御札指し		当館	
86	日光脇往還 根岸宿		当館	模写
87	御札 日光二荒山神社		当館	
88	東海道五十三次	安藤広重	当館	複製
89	木曾街道六十九次	安藤広重	当館	複製
90	矢立		当館	
91	たばこ入れ		当館	
92	和漢薬 百草		当館	
93	五鈷鈴	富士浅間講	当館	
94	「根岸村絵図」		個	